



AI翻訳時代における翻訳主体性の再定義 : 人間-AI 協働モデル下の訳者職能の変容

湯, 瑾

(Citation)

年報Promis, 4(1):55-70

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504131>



〈論文〉

AI 翻訳時代における翻訳主体性の再定義 ——人間—AI 協働モデル下の訳者職能の変容

Redefining Translator Subjectivity in the Age of AI Translation — Translator Roles in Human—AI Collaboration

湯 瑾
TANG Jin

要 旨

ニューラル機械翻訳や大規模言語モデルの発展により、AI 翻訳の水準が向上し、翻訳実践および翻訳研究の前提条件そのものを大きく変化させつつある。こうした状況の下、翻訳はもはや単一の人間訳者による行為として完結するものではなく、人間と AI が複雑に関与し合う協働的過程として遂行されている。本稿は、この変化を踏まえ、AI 翻訳時代における翻訳主体の構造的再編を理論的に検討し、翻訳主体性の再定義を試みることを目的とする。アクターネットワーク理論を理論的枠組みとして援用し、翻訳行為を人間訳者、アルゴリズムや学習材料、インターフェースなど複数のアクター（行為者）が関与するネットワーク的实践として捉え直す。その上で、訳者としての職能の変容を分析し、訳者が翻訳行為の担当者から意味の判断者、文化のゲートキーパー、人間—AI 協働の設計者・調整者、そして倫理道德の責任者へと役割を拡張していることを明らかにする。人工知能の時代では、AI 翻訳を翻訳者の代替としてではなく、翻訳主体を再構成する契機として位置づけることで、翻訳の専門家が如何にして翻訳ネットワークの中核として機能するかを示唆したい。

キーワード

AI 翻訳、翻訳主体性、人間—AI 協働モデル、アクターネットワーク理論、訳者職能

Ⅰ はじめに

近年、人工知能（AI）技術の急速な発展は、翻訳実践および翻訳研究の在り方に根本的な変化をもたらしつつある。とりわけ、ニューラル機械翻訳（NMT）や大規模言語モデル（LLMs）を基盤とする翻訳技術は、従来のルールベースもしくは統計的な機械翻訳に比して著しく高い流暢性と正確性を実現し、翻訳が専門職として有してきた独占性を大きく揺さぶっている。2022 年末に公開された ChatGPT をはじめとする生成系 AI は、翻訳専用システムではないにもかかわらず、多言語環境において高水準の翻訳性能を示し、一般ユーザーにも広く利用されるようになっていく。さらにその手軽に使える便利さとコストの低さを持ち併せているため、「翻訳はもはや専門職ではない」や「AI は翻訳者を代替するのではないか」という言説が、メディアや日常的言説の中で繰り返し語られるようになっていく。

しかしながら、AI 翻訳は果たして人間の翻訳者を代替するのであろうか。確かに近年の機械翻訳の性能向上は目覚ましく、日常会話や実用文、技術文書など一定の領域においては、人間翻訳に匹敵する水準の訳文が生成される場面も少なくない。一方、翻訳の現場に身を置く実務家や研究者の間では、「機械翻訳が高精度化したからといって、翻訳という営為そのものが単純化されたわけではない」という実感もまた広く共有されている。むしろ、AI 翻訳の普及によって、訳文の妥当性判断、文化的配慮、語用的調整、責任の所在といった問題は、従来以上に複雑な形で浮上してきているように思われる。

筆者は長年にわたり翻訳・通訳の実務に従事しており、AI 翻訳の便利さと限界の両方を強く実感している。昨年度の万博関連の国際会議において、主催者側がとある会社の機械同時通訳システムを導入したが、思うほどうまく進まず緊急に翌日の人間通訳者を探す羽目になった。筆者は現場で AI 同時通訳画面を確認したところ、発言者の強い訛りや方言、文脈依存的な発話に対応できず、画面に表示された訳文は一部意味不明あるいは著しく逸脱した内容となっていたことがわかった。この経験は、AI 翻訳が一定の場面では有効である一方で、言語の揺らぎや語用的要素、聴覚的情報を含む複雑なコミュニケーション環境においては、依然として人間の判断と介入が不可欠であることを強く示している。

このような現状は、翻訳を単なる「言語の置き換え作業」とみなす理解が、現実の翻訳行為を十分に捉えきれていないことを示唆している。翻訳は本来、語彙や文法の対応関係のみならず、文脈、文化、価値観、社会的関係性などを含めた広範な意味構築の営為である。その意味において、翻訳は本質的に解釈を伴う行為であり、そこには必然的に判断・選択・責任といった要素が介在する。AI 翻訳が高度化した今日においても、これらの側面が完全に自動化されたとは言い難い。

すでに多くの AI 翻訳をめぐる議論が進められている中、機械翻訳の特徴や限界、翻訳テキストの精度、翻訳物比較、産業応用といった実践的側面に焦点を当てる傾向が強いように見られる。新しい技術を応用する以上、いかに最大限の生産性を発揮させるか、そしてその可能性を見極めようとするのは当然の動向である。しかし、人工知能がもたらしたのは新しい翻訳の手段だけではなく、翻訳行為そのものの変化でもある。翻訳研究を行う場合、翻訳の主体を従来のように「単一の人間訳者」として想定し続けることが、現在の翻

訳実践の実態を適切に説明しうるのかという問題は、翻訳研究において真剣に再考される必要がある。

実際の翻訳実践に目を向けると、今日の翻訳は、訳者が単独で原文を読み訳文を生成するという従来型の作業モデルから大きく変化している。翻訳者にとっては、機械翻訳が職を取り上げる脅威的な存在でありながら、仕事の助太刀にもなっている。翻訳前の情報収集や理解の段階から AI ツールを活用し、訳文生成の過程では機械翻訳を参照し、さらに訳後においては生成結果を批判的に検討し修正するという、多層的な関与を行っている。ポストエディットという新しい職まで生まれていた。

こうした状況は、「翻訳行為の主体は誰なのか」「翻訳行為の構造はどのように変容しているのか」という問いそのものを、あらためて根本から問い直すことを要請しているように思われる。翻訳研究は、AI 翻訳の登場を単なる外的環境の変化として捉えるのではなく、翻訳行為の構造そのものが変容しつつある現象として理論的に捉え直す必要があるのではないだろうか。

本稿は、以上の問題意識に基づき、人工知能時代における翻訳行為の構造変化と翻訳主体の再構成を理論的に検討することを目的とする。特に、従来の翻訳理論およびアクターネットワーク理論 (Actor-Network Theory, ANT) を理論的枠組みとして援用しながら、人間訳者と AI が関与する翻訳実践を、「人間-AI 協働による意味生成過程」として捉え直す視座を提示し、人間訳者の職能の将来性について検討したい。

II 理論的背景

2.1 翻訳主体性の位置づけ

翻訳研究において、訳者の主体性は長らく中心的な問題として論じられてきた。初期の等価論的翻訳理論では、翻訳は「原文意味の忠実な再現」として理解され、訳者の役割は原文をできる限り正確に再現する媒介者とみなされる傾向が強かった。しかし、1960、70年代以降の翻訳理論の展開において、翻訳は単なる言語変換行為ではなく、文化的・社会的実践として捉えられるようになり、訳者の主体的関与が理論の中核に位置づけられるようになった。

その代表的な理論潮流の一つが解釈学的翻訳論である。ガダマーの解釈学に基づき、翻訳における理解とは「前理解」を前提とした解釈行為であり、訳者は自身の歴史性や経験を背景としながら原文と向き合う存在であるとされる。また、「地平融合」¹の概念は、翻訳が原文の意味を単純に移植する作業ではなく、訳者と原文との間で新たな意味が生成される過程であることを示している。この観点に立てば、訳者は透明な媒介者ではなく、意味構築に積極的に関与する主体である。

さらに、ポスト構造主義および脱構築的翻訳論においては、訳者主体の位置づけはより

¹ 「地平」とは人間の思考や判断する場合の歴史的・文化的な視野の限界。理解の営みとは二つの異なる「地平」が出会う出来事とされている。この意味では、翻訳者は両方の解釈者として存在し、自分自身の「地平」を持っていると考えられる。

ラディカルな形で再構成された。ジャック・デリダは、意味は常に「差延」によってずらされ続けるものであり、原文に固定的な「唯一の意味」は存在しないと論じてきた²。この哲学的立場に立てば、翻訳とは「再現」ではなく、原文テキストの意味可能性を再編成する行為であり、訳者はテキストの意味を「再生産する者」ではなく、「生成に関与する者」として理解されることになる。

文化論的翻訳研究もまた、訳者の主体性を強く前景化した理論潮流である。イブン・ゾハールらのポリシステム理論、レフェーヴルによる「リライト」、ヴェヌーティによる「異化／同化」論などは、翻訳が常に文化的規範、権力構造、イデオロギー、詩学といった要因の中で行われる社会的実践であることを明らかにしてきた。また、スコポス理論は、翻訳の目的が翻訳行為を規定することを強調し、受け手文脈に応じた機能的行為として翻訳を理解する枠組みを提供した³。これら一連の翻訳理論では、訳者は単なる言語変換者ではなく、文化的意味の調整者、選択者、再構成者として位置づけられている。

以上のように、現代翻訳理論の多くは共通して、翻訳者という主体によって行われる行為であるという前提に立脚している。翻訳者は意味を機械的に転送する存在ではなく、文脈を解釈し、文化を調整し、価値判断を行う存在であり、翻訳行為は本質的に創造的かつ解釈的な行為であると理解されてきたのである。

2.2 翻訳不可能と機械翻訳の限界

訳者主体性の議論と密接に関わる概念が、翻訳の「不可能性」である。ローマン・ヤコブソンは翻訳を「言語内翻訳」「言語間翻訳」「記号間翻訳」に分類し、言語間翻訳においては完全な意味対応は原理的に不可能であると指摘した⁴。デリダは、翻訳が完全な意味回収を不可能にする一方で、意味生成のために不可避な営為であるという逆説的構造を指摘している。これらの指摘は、翻訳が常に「差異」を内包する行為であることを理論的に示している。

翻訳研究においては、不可訳性はしばしば二つの側面から論じられてきた。第一に、語彙、文法、韻律、修辞など言語体系に起因する「言語的不可訳性」である。例えば、漢詩や俳句における韻律、語順の美、語感の微妙な差異などは、形式的対応によっては十分に再現することが困難である。第二に、宗教的背景、歴史的な文脈、文化的象徴、価値観といった文化的要因に基づく「文化的不可訳性」である。典故や成語、儀礼的言語、政治的言説などは、単語対応の翻訳では本来の意味を伝えることができない場合が多い。

この点は、AI 翻訳の限界を考察する際に極めて重要である。ニューラル機械翻訳や大規模言語モデルは、大量の言語データを統計的・確率的に処理することによって高精度の訳文を生成している。しかし、その処理は基本的に言語表層のパターン認識に基づいており、歴史的な文脈の理解、価値判断、文化的意味の選択といった側面においては、依然として根本的制約を有している。

² 高橋哲哉 (2003) 『デリダ 脱構築』講談社。参照。

³ Mona Baker (1998) Routledge Encyclopedia of Translation Studies. Routledge.

⁴ Roman Jakobson (1959) On Linguistic Aspects of Translation.

例えば、「山川異域、風月同天」という文学表現を単純に直訳すれば“Mountains and rivers are in different regions, yet we share the same sky and moon”のような文になるが、日本語文化における受容史や修辭的傳統を踏まえた場合、「山川、域を異にすれども、風月、天を同じうす」といった表現でなければ、その文化的響きは十分に伝達されない。このような翻訳判断は、語彙対応や確率モデルのみでは導き出すことが困難であり、文化的知識と価値判断を伴う人間の解釈行為に依存している。

現段階では、現代詩と俳句&短歌、さらに曖昧性や婉曲表現など特徴のある日本文も訳せるものが増えてきたし、文法による意味の違いにも対応できるようになってきた。しかし、AI 翻訳の限界としては、「意識はできない」、「文化を踏まえた翻訳は期待できない」、「文脈情報を踏まえた翻訳はできない」と指摘されている⁵。

また、言語レベルの誤訳も少なくない。例えば、専門用語の不適切、重複と漏れ、文節の区切りの不適切、語法的共起関係の誤り、語順の誤りなど、プロの訳者にはあまり見当たらない語彙レベルと語句レベルのミスが散見される⁶。

このことは、AI 翻訳がどれほど高度化したとしても、翻訳行為のすべてを代替しうるわけではないことを理論的に示している。翻訳が本質的に「意味生成の行為」である以上、翻訳主体の問題は、単なる技術論の枠内では解決されえない。

もちろん、人工知能は学習能力を備えているため、翻訳能力がこれからさらに向上する可能性も大きい。また、近年の大規模言語モデル（LLM）の発展によって、文脈に応じた推論能力が高くなり、AI が単なるパターン認識を超えたある種の意味処理を行っていることを示唆している。例えば、GPT-4 などの最新モデルは、複雑な推論タスクにおいて、単語の統計的共起ではなく、概念間の関係性のある程度把握しているように見える振る舞いを示す。

しかしながら、ここで重要な区別が必要である。AI の「意味処理」は、人間の「理解」すなわち身体的・経験的な関与や価値判断、意図的な意味構成とは異なる性質を持つ。AI は意味のあるように見える出力を生成できるが、それは意味を理解していることとは区別されるべきである。本稿は、AI の能力を過小評価するつもりはないが、翻訳が本質的に解釈と判断を伴う行為である以上、人間の「理解」とAI の「処理」の間には、質的な断絶が存在し続けると考える。

2.3 主体概念の再構成：アクターネットワーク理論の視座

AI 翻訳の普及によって、翻訳行為がもはや「人間訳者のみ」によって完結していないという事実も否定できない。AI 時代の翻訳実践においては、訳者は翻訳支援ツール、機械翻訳ソフト、コーパス、用語データベース、インターフェース設計、アルゴリズム構造など、さまざまな非人間的要素と相互に関係しながら翻訳作業を行っているのは現実である。

このような状況を理論的に捉える枠組みとして、筆者が注目しているのはブリュノ・ラトゥールらが提唱しているアクターネットワーク理論（以下 ANT と略す）である。ANT

⁵ 成田一（2024）「AI 翻訳にも限界がある」。

⁶ 魏子杭・沈伊超・趙雪（2020）「人機合作翻訳模式下『訳前編集』策略研究」。

は、社会科学における理論的、方法論的アプローチで、人間と非人間を区別せず、あらゆる存在を「アクター」（行為者）として捉え、それらが絶えず変化するエージェンシーのネットワークの中で社会的実践が成立すると考える理論である。その中、核心的な概念は「トランスレーション（translation）」がある。トランスレーションとは、あるアクターによる置換や変容の結果として、あるアクターが他のアクターを支配する状況を生み出すプロセスとされる。ラトゥールは「トランスレーション」を以下のように述べている⁷。

Translation is the interpretation given by the fact-builders of their own interests; indeed, they cannot but translate the interests of others into their own language.

興味深いことに、英語の"translation"は「翻訳」と「変容・転換」を兼ねるように、フランス語の"traduction"もまた同じ語源を持つ。ラトゥールは意図的にこの言語的響きを活かし、科学的事実や技術の対象が社会的ネットワークを通じて「トランスレーション」され、変容し、拡張されていく過程を分析してきた。この理論においては、意味や行為の主体は単一の人間に帰属するのではなく、非人間を含む多くの異種混淆の要素が連関するネットワークの中で分散的に生成される。

この視座を言語的翻訳に適用すれば、翻訳行為は単なる意味の伝達ではなく、原文が異なる言語・文化・技術的媒体を通じて転換されていく過程として捉えられる。AI 翻訳システムは、この過程における一つの結節点（obligatory passage point）として機能し、原文の意味をトランスレーションする力を持つ。しかし、その「トランスレーション」は人間訳者による「翻訳」とは異なる性質を持ち、両者が相互作用することで、最終的な訳文が生成されるのである。人間的要素といえば、訳者、エンジニア、デザイナー、開発者、プログラマー等が存在しているし、非人間的要素といえば、AI 翻訳モデル、アルゴリズム、学習データ、翻訳支援環境、プラットフォーム等が挙げられる。翻訳はこのように多様な行為者が相互に関与するネットワーク的实践として理解されるべきである。すなわち、翻訳の主体は単一的存在ではなく、分散的に構成された主体として再定義される必要がある。

このような主体概念の再構成は、AI 翻訳時代の翻訳行為を理解する上で不可欠であり、次章以降において論じる翻訳プロセスの構造変化および人間訳者の職能の再編成を理論的に支える基盤となる。

しかしながら、ANT を翻訳研究に適用する際には、理論的な緊張関係が二つ存在することを認識しておく必要がある。まず、ANT は人間と非人間を対称的に扱うが、言語翻訳において意味を最終的に理解するのは人間であるという点で、完全な対称性は成立しない。AI は言語変換を行うが、その出力が正しいかどうかを判断するのは人間訳者である。この非対称性は、翻訳ネットワークにおける人間の特殊な位置を示唆している。

第二に、ANT は責任をネットワーク全体に分散させる傾向があるが、現実の翻訳現場で

⁷ Bruno Latour (1987) Latour: Science in Action - How to Follow Scientists & Engineers through Society. p.117. 通常、アクターネットワーク理論の「翻訳」概念と使用されているが、本稿では言語翻訳と区別するため「トランスレーション」と表記する。

は誰が責任を負うのかという問いは不可避である。AI 翻訳による誤訳が問題を引き起こした場合、依頼者はネットワーク全体ではなく、具体的な訳者または翻訳会社に責任を追及する。したがって、本稿が提案する分散的主体は、対等な分散ではなく、人間を中枢とした非対称的分散として理解され、かつ人間訳者が最終的な責任を負う存在として位置づけられるべきである。

III 技術環境の変容と翻訳実践の再編成

3.1 機械翻訳の発展

機械翻訳は、計算機技術を用いて自然言語間の自動変換を実現しようとする試みであり、その発展史は人工知能研究および計算言語学の発展と密接に連動している。機械翻訳の着想自体は1930年代にまで遡り、翻訳作業を機械的に処理する可能性が構想段階で議論されていたとされる。しかし、本格的な研究として始動したのは、電子計算機が実用化された1950年代以降である。

1950～60年代の機械翻訳研究は、主としてルールベースの機械翻訳(RBMT)に基づいていた。この方式では、語彙対応表、文法規則、構文変換規則などを人間があらかじめ記述し、それに従って翻訳処理を行う。翻訳は言語規則を適用する処理として理解され、計算機によって再現可能な形式的操作の集合と見なされていた。しかしこの方式は、言語の曖昧性や文脈依存性、多義性への対応に限界があり、規則記述の膨大さも相まって実用化には大きな困難が伴った。

1970年代以降、こうしたルール中心のアプローチに対する反省から、人間の翻訳は必ずしも明示的な規則適用によって行われているわけではないという認識が徐々に広がり始める。その中で、過去の翻訳例を利用して類推的に翻訳を行うという発想が提示され、用例基盤機械翻訳(EBMT)の研究が展開された。このアプローチは、日本の計算言語学者である長尾真によって体系的に提唱されたことで知られている。EBMTは、翻訳をルールの適用ではなく類似例の検索と再構成として捉えた点に特徴があり、後のデータ駆動型翻訳研究への理論的橋渡しとなった。

1990年代に入ると、コンピュータ性能の向上と大規模コーパスの整備を背景に、統計的機械翻訳(SMT)が主流となる。SMTでは、原文と訳文の大量の対訳データから確率モデルを構築し、ある語列に対して最も確率の高い訳文を選択するという枠組みで翻訳が行われる。この段階において、翻訳は規則に基づく決定論的処理から、確率的選択に基づく処理へと理論的理解を大きく転換したと言える。

2010年代に入ると、深層学習技術の発展に伴い、ニューラル機械翻訳が登場する。2014年に提案されたエンコーダ・デコーダモデルは、入力文をベクトル表現に変換し、それをもとに訳文を生成する枠組みを示し、翻訳を意味表象の変換過程として捉える新たなモデルを提示した。さらに2017年、ヴァスワニらによって提案されたトランスフォーマーモデ

ルは、機械翻訳の性能を質的に大きく向上させた⁸。

こうした技術的発展の延長線上に位置づけられるのが、2022 年末に公開された ChatGPT に代表される大規模言語モデルである。これらは翻訳専用システムではないにもかかわらず、やがて翻訳分野で一般的に応用され、翻訳が単なる文対応の変換作業ではなく、文脈理解や意味推論を伴う言語生成行為であることを改めて意識させる存在となった。

このように機械翻訳の発展を概観すると、その技術的進化は単なる精度向上の歴史ではなく、「翻訳とは何か」という理解そのものを段階的に変容させてきた過程として捉えることができる。すなわち、翻訳はルール適用の処理から確率的選択の処理へ、さらに意味表象の変換へ、そして文脈的言語生成へと、理論的理解を更新し続けてきたのである。

3.2 翻訳プロセスの構造変化：単一モデルから人間-AI 協働モデルへ

従来の翻訳理論において、翻訳過程は一般に「原文理解 → 意味転換 → 訳文生成」という単線的プロセスとして把握されることが多かった。訳者は原文を読み取り、その意味を把握した上で、目標言語によって意味を再構成し、訳文として出力する存在と想定されており、翻訳行為は訳者個人の内的認知過程の中で完結するものとして前提化されてきた。

しかし、AI 翻訳技術が翻訳実践の一部となった現在、このような単線的モデルはもはや翻訳の実態を十分に説明することができない。翻訳支援ツール、機械翻訳エンジン、用語データベース、翻訳メモリ、検索エンジン、さらには入力形式やインターフェース設計といった要素が翻訳行為に深く関与する環境が形成されており、翻訳は複数の行為者が関与する過程として実行されている。

とりわけニューラル機械翻訳や大規模言語モデルの普及により、翻訳作業の流れは次第に次のような構造を帯びるようになった。①訳者による原文理解、②AI への入力、③AI による訳文生成、④訳者による評価・修正・再編集、という複数段階の循環的プロセスである。この構造において、訳者は単なる最終出力者ではなく、翻訳全体の過程を統括・制御する存在として位置づけられる。

重要なのは、人間-AI 協働がポストエディットという単一工程に限定されるものではないという点である。実際には、訳者は訳前段階においても AI を活用しながら文脈理解や情報収集を行い、訳中においてもプロンプト設計や入力調整によって AI の出力を誘導し、訳後においては文化的妥当性や意味的一貫性を判断しながら修正を加えている。すなわち、人間-AI 協働は翻訳過程の特定部分ではなく、すべての段階に浸透し翻訳行為の全体構造を規定している。

このように、人間と AI は翻訳プロセスの各段階において異なる形で関与し、翻訳の主体性は固定的に帰属するものではなく、段階的に移動・再配分される。本稿では、この現象を主体性の段階的移譲と捉える。例えば段階①訳者による原文理解の場合、主体は人間訳者である。この時点では AI は関与せず、訳者が原文の文脈、文化的背景、意図を解釈する。段階②AI への入力になると、主体は人間訳者とインターフェースの共同構成になる。訳者

⁸ 陸曉蕾・黃玲毅 (2020)「機器翻譯技術研究：演變與展望」參照。

がどのように原文をプロンプトとして構成するか、あるいはどの部分を入力するかを選択が、AI の出力を規定する。段階③AI による訳文生成の場合、主体は AI システムである。この段階では人間は待機し、AI の判断を受け入れる。もっとも、AI の主体性は自律的なものではなく、その AI システムを構築したアルゴリズム・学習データ・計算環境などによって分散的に構成され、擬似的な主体性を持っている。段階④訳者による評価・修正・再編集になると、主体性は再び人間訳者へと回収され、訳者は生成された訳文の意味の妥当性や文脈の適切性を判断する役割を担う。

この循環的構造において、翻訳は固定的な技術行為ではなく、人間と AI の相互作用によって継続的に調整される動的過程として理解されるべきである。翻訳主体もまた単一的存在ではなく、複数の行為者が関与する過程の中で分散的に構成される存在として再定位される必要がある。この翻訳プロセスの構造変化を踏まえ、次節では、人間-AI 協働モデルにおける翻訳主体の形成についてより包括的に検討する。

3.3 人間-AI 協働モデルの翻訳主体の形成

前章までに整理したように、従来の翻訳研究は、翻訳主体を主として「単一の人間訳者」として想定し、その解釈能力や意思決定能力に焦点を当てて理論化を行ってきた。しかし、AI 翻訳が翻訳実践の中核的要素として広く組み込まれるようになった現在、この前提そのものが再検討を迫られていると考えられる。

前節で説明したように、訳者は訳前・訳中・訳後の各段階において AI 翻訳システムと多層的な関与を行っている。AI 翻訳システムは単なる道具ではなく、翻訳過程に能動的に影響を与える行為者の一部として位置づけられる。翻訳はもはや人間のみの行為として完結しているのではなく、人間と機械が相互に関与し合うコラボレーションで遂行されているのである。

本稿では、翻訳の主体を「人間訳者と AI システムを含む複数の要素によって構成される分散的主体」として捉え直す必要があると考える。すなわち、翻訳は一人の訳者による行為ではなく、人間、技術、制度、環境などを含む複数のアクターが関与するネットワーク的過程として理解されるべきである。これらのアクターがすべてネットワークの結節点として総合作用を果たし、最終的に産出される訳文に影響を与える。さらに詳しく分けると、各社 AI モデルが開発段階における目的、採用したアルゴリズム、言語学習のデータ、入力形式、プラットフォームなど非人間的要素すべてが翻訳プロセスの参加者である。訳文は、単に訳者の内的認知から生まれる成果物ではなく、多様な行為者が構成するネットワークの中で共構成される産物である。

訳者はもはや訳文を一から生成する唯一の主体ではなく、AI の出力を批判的に評価・修正し、文脈の妥当性や文化的適切性を担保する調整者としての役割を担うようになっている。つまり、翻訳主体は人間から機械へ移行するのではなく、人間と機械によって再編成されると捉える方が適切である。このように捉えると、翻訳における訳者の役割も再構成される必要があると考えられる。

本稿は、このような観点から、翻訳の主体を人間-AI 協働によって構成される動的な主体として再定義することを提案する。この再定義は、単に翻訳実務の変化を説明するため

だけでなく、今後の翻訳教育や翻訳倫理、職能形成を理論的に検討するための基盤としても重要な意義を持つと考えられる。

IV 訳者職能の変容——実行者から調整者・判断者へ

4.1 AI 時代における訳者職能の多層化

従来の翻訳観において、訳者は基本的に、原文を理解した上に他言語に転換する専門職として位置づけられてきた。翻訳能力とは、主として言語能力、専門知識、文体感覚などによって評価され、訳者の職能は訳文の正確性や自然さによって測定されるものとされていた。こうした理解は、翻訳行為がほぼすべて人間訳者の内部認知過程によって完結していた時代においては、一定の妥当性を有していたと言える。

しかし、AI 翻訳技術が実用レベルで普及した今日において、この訳者像は現実の翻訳実践を十分に説明できなくなりつつある。多くの翻訳現場では、機械翻訳が初期訳文を生成し、人間訳者がそれを評価・修正・再構成するという作業形態が一般化している。また、訳前段階においても、訳者は情報収集、用語確認、背景理解などにおいて AI ツールを積極的に利用している。翻訳成果物はもはや訳者による産物ではなく、人間と AI の相互作用の結果として生み出されている。

このような状況において、訳者を従来どおり言語変換の専門家としてのみ理解することは、訳者の実際の役割を過度に単純化していると言わざるを得ない。必要とされているのは、訳者職能の再定義であり、翻訳実践の構造変容に即した新たな理論的枠組みである。

AI 翻訳が広く使われている現在、訳者に求められる能力と役割は質的に変化している。本稿では、AI 時代の訳者職能を、以下のような複数の次元において再構成することができると考える。

第一に、訳者は文化のゲートキーパーとしての役割を担う存在となっている。AI 翻訳は語彙対応や構文処理において高い精度を示す一方で、文化的含意、歴史的背景、価値的ニュアンスといった側面に対しては依然として不安定である。宗教的表現、政治的言説、慣用表現、文学的修辞などの翻訳において、どの表現を選択すべきかを判断するためには、文化的文脈に対する理解と解釈が不可欠である。このような判断は確率モデルによって自動的に導出されるものではなく、人間訳者の文化的感受性と解釈能力に依存している。

第二に、訳者は意味の判断者としての役割を強く帯びようになっている。AI が生成する訳文は表面的には自然で流暢であっても、文脈に照らして不適切な解釈を含んでいたりと、論理的一貫性を欠いていたりとする場合がある。そのため、訳者は単に訳文を「修正する」存在ではなく、AI の出力が意味的に妥当かどうかを判断し、必要に応じて翻訳戦略そのものを調整する役割を担う。ここでは、訳者の役割は「修正者」ではなく、「意味生成過程の管理者」として理解されるべきである。

第三に、訳者は人間-AI 協働の設計者・調整者としての側面を持つようになっている。AI 翻訳を利用する際、訳者は入力文の形式を工夫したり、プロンプトを調整したり、複数の候補を比較検討したりすることによって、AI の出力を能動的に誘導している。このよう

な行為は、単なる補助作業ではなく、人間がAIの振る舞いを設計するプロセスであり、翻訳成果物の質を大きく左右する要因となっている。すなわち、訳者は翻訳ネットワーク全体の制御点として機能しつつある。

第四に、訳者は倫理的責任主体としての役割を引き受ける存在でもある。AI翻訳には、訓練データに由来する偏見、誤情報の生成、著作権問題、文化的誤解の増幅など、さまざまなリスクが内在している。こうした問題に対して最終的な責任を負うのは、現実の運用においては依然として人間であることが多い。したがって、訳者はAIを使う責任者として、その使用方法を判断し、結果に対する社会的・倫理的責任を担う主体でもある。

以上のように、人工知能時代の訳者はただ単なる翻訳を実行する者ではなく、翻訳プロセス全体を調整し、意味生成を管理する専門職として理解されるべき存在へと変容している。この四つの役割は、ANT的視点から見れば、訳者が翻訳ネットワークの中で占める結節点としての位置を示している。ラトゥールが論じるように、ネットワークにおいて特定のアクターが通過点となり、他のアクターの行為を調整・制御する機能を持つ場合、そのアクターはネットワークの中核となる。AI時代の訳者は、単なる翻訳者から翻訳ネットワークの調整者へと位置づけを変えつつあり、その結果、より高度な抽象化と判断能力が求められているのである。

4.2 訳者職能の再編：適応論を越えて「中核」へ

近年、情報技術の発展に伴う訳者役割の変化について論じた研究も徐々に蓄積されつつある。例えば、情報社会における訳者の「生態位 (niche)」の変化に着目し、訳者に求められる能力を技術的能力、自律的学習能力、社会的能力などの観点から整理した研究がある⁹。ほかにも機械翻訳の普及に対応した翻訳者の「生存戦略」や「自己更新」の必要性を論じる研究が見られる。

これらの研究は、AI環境下で訳者がどのように専門職として生き残り、自己更新していくべきかという実践的課題を扱っており、その問題意識は本稿とも共有されている。しかしながら、こうした研究の多くは、基本的に環境変化に対する訳者の適応という枠組みにとどまっている傾向がある。すなわち、技術が変わったから、訳者も能力を更新すべきであるという議論構造が前提とされており、翻訳行為自体の構造変化や、翻訳主体の再構成という理論的次元には十分に踏み込めていない。

適応論が抱える根本的な問題は、翻訳という行為の構成原理を変えずに、訳者の能力だけを問題にしている点にある。しかし、翻訳はすでに訳者が原文を理解して訳文を生成するという単純なモデルではなく、翻訳行為の構造自体が変容しているのであり、訳者は単に新しいスキルを身につけるのではなく、ネットワークの中で新しい位置を占める存在へと再編成されつつある。

本稿の立場は、単に訳者が環境に受動的対応という水準を超え、翻訳という行為の内部構造が変容しているという点に焦点を当てるものである。すなわち、問題は訳者が生き残れるかどうかではなく、翻訳主体はいかに再編成されつつあるのか、翻訳職能はどのよう

⁹ 陳菁・溫艷娟 (2024) 「信息時代訳員生態位的演变与優化」。

に構造化され直しているのか、という理論的問いにある。この観点に立てば、訳者職能の変容は、単なる能力更新の問題ではなく、翻訳行為の構造変化として理解されるべきである。

従来の訳者は翻訳行為の中心的実行者であった。原文を読み取り、その意味を把握した上で、目標言語によって意味を再構成し、訳文として出力する。この一連の過程は、訳者一人の内的認知過程の中で完結するものとして前提化されてきた。訳者の職能は、主として言語能力、専門知識、文体感覚などによって評価され、翻訳能力は訳文の正確性や自然さによって測定されるものとされていた。

しかし、AI 翻訳技術が実用レベルで普及した今日、この訳者像は現実の翻訳実践を十分に説明できなくなりつつある。多くの翻訳現場では、機械翻訳が初期訳文を生成し、人間訳者がそれを評価・修正・再構成するという作業形態が一般化している。訳者はもはや「一から訳文を生成する者」ではなく、「AI の出力を統合し、最終的な意味の妥当性を担保する者」へと位置づけを変えている。

この変化を理論的に捉えるために、本稿は訳者の位置を「中心」から「中枢」へと再定義する。「中心」とは、翻訳行為が訳者一人の認知の中で完結するという意味である。対して「中枢」とは、翻訳ネットワークの中で訳者が「結節点」として機能するという意味である。ラトゥールが論じるように、ネットワークにおいて特定のアクターが「通過点」となり、他のアクターの行為を調整・制御する機能を持つ場合、そのアクターはネットワークの「中枢」となる。

AI 時代の訳者はまさにこの「中枢」として機能している。訳者は、AI 翻訳モデル、用語データベース、翻訳記憶、依頼者、読者、文化的文脈など、多様なアクターからの情報を統合し、最終的な訳文という出力を生成する。しかし、その成果物は訳者単独の産物ではなく、ネットワーク全体の共同作品である。訳者の重要性は低下しているのではなく、むしろ逆に、翻訳プロセスが複雑化・多層化したことによって、訳者の役割はかつて以上に高度で抽象的な次元へと移行している。人間訳者は翻訳ネットワークの中心的な結節点として位置づけられ、すべてのアクターが訳者を通過して相互に関係を持つ。原文から訳文へ至る情報はすべて訳者を通過し、訳者はその過程で各アクターの出力を評価・選択・調整する権能を持つ。訳者の職能は、言語処理能力から、意味判断能力、文化的調整能力、技術運用能力、倫理的判断能力へと拡張している。

以上の議論から明らかなように、AI 翻訳時代における訳者職能の変容は、単なる能力の更新ではなく、位置の再編及び構造の変化として理解されるべきである。訳者は翻訳ネットワークの中で、新たな位置と機能を担う存在として再編成されており、その変容を理論的に記述することこそが、AI 時代の翻訳研究に求められている課題である。

このような職能変容を正確に捉えることは、翻訳研究の新たな方向性を示し、翻訳教育の再設計においても重要な意味を持つ。従来の翻訳教育は、言語変換能力の育成を中心に据えてきた。しかし、AI 時代の訳者教育には、以下のような新たな次元が求められる。第一に、AI リテラシーの育成である。これは単に AI ツールの操作方法を覚えるのではなく、AI の能力と限界を批判的に理解し、いつ・どのように AI を活用すべきかを判断する能力である。第二に、意味の判断能力の育成である。AI が生成する複数の候補や、文脈に照ら

して不適切な解釈を含む出力に対して、この文脈で適切か否かを問う能力である。ここでは、訳者は修正者ではなく、意味生成過程の管理者として理解されるべきである。第三に、倫理的責任能力の育成である。AI 翻訳の利用には、訓練データに由来する偏見、誤情報の生成、著作権問題など、さまざまなリスクが内在している。こうした問題に対して最終的な責任を負うのは依然として人間であり、その自覚と判断能力が求められる。

このように、AI 翻訳の発展は翻訳の終焉ではなく、むしろ翻訳という行為の本質を再認識させ、訳者教育を再編させる契機として理解されるべきである。

V AI 時代における翻訳研究パラダイムの転換

5.1 従来の翻訳研究パラダイムの特徴と限界

翻訳研究は長らく、主として以下の三つの領域を中心に展開してきたと整理できる。第一に、訳文や訳者を対象とした翻訳成果物・翻訳行為の分析である。同一原文に対する複数訳の比較、翻訳方略の分析、訳文の質評価などが主要な研究対象とされてきた。第二に、翻訳教育研究であり、学習者の翻訳能力育成、教材設計、教授法などが議論の中心となってきた。第三に、翻訳理論研究として、等価論、機能主義、文化翻訳論、ポリシステム理論など、翻訳行為を説明する理論枠組みの構築が試みられてきた。

これらの研究はいずれも翻訳研究の発展に重要な貢献を果たしてきた。しかし、その多くは暗黙の前提として「翻訳主体＝人間訳者」「翻訳行為＝人間の認知活動」という枠組みを保持している。翻訳成果物は人間訳者単独の認知活動によって生み出されるものと前提化され、翻訳過程は個人の内的プロセスとして捉えられてきたのである。

この前提は、AI 翻訳が翻訳者の間でも普及されるようになった現在、その説得力を失いつつある。翻訳成果物はもはや人間訳者単独の産物ではなく、人間－AI・ツール環境・アルゴリズム・データといった複数の要素が関与する複合的プロセスの中で形成されている。したがって、従来の研究枠組みのみでは、翻訳行為の実態を理論的に把握することが困難になりつつある。パラダイムの転換が避けられないものである。

5.2 新たな研究対象としての「人間－AI 協働モデル」

AI 翻訳技術の普及は、翻訳研究の対象そのものを変容させている。従来の翻訳研究が主として訳文や訳者個人を分析対象としてきたのに対し、AI 時代の翻訳研究においては、翻訳システム全体、すなわち人間と非人間の協働構造そのものが研究対象となりつつある。この転換は、研究対象の単なる拡大ではなく、質的な変化である。従来は良い訳文はどのように生成されるかという問いが中心であった。しかし現在では、翻訳はどのようなアクターネットワークによって成立しているか、人間と AI の協働構造は翻訳の本質をどのように変容させているか、翻訳における責任主体はどのように構成されているか等、こうした問いが中心的となる。

具体的には、以下の研究課題が浮上している。第一に、人間訳者と AI の役割分担の構造

化分析である。どの段階で誰がどのような判断を行うか、この協働構造を明らかにすることが、翻訳プロセス研究の新課題となる。第二に、翻訳評価の再検討である。質の決定要因は個人にめぐる能力や文化背景ではなく、システム全体の構成によって決定されつつあるのではないかと検証する必要がある。これに関連して翻訳の評価基準も再考すべきであろう。第三に、従来の翻訳理論の適用限界の検討である。等価論、文化翻訳論、スコポス理論などは機械翻訳のどこまで適用可能か、理論的再検討が求められる。

これらの問いは、従来の「翻訳を個人行為として分析する」という従来パラダイムの限界を示している。翻訳研究は、今や個人訳者の行為分析から、人間-AI 協働システムの構造分析へと研究対象を拡張する必要に迫られている。

5.3 学際化する翻訳研究——認知・技術・倫理の交差点として

AI 翻訳をめぐる諸問題は、翻訳研究を単独の人文科学領域にとどまらせない。翻訳行為が人間の認知、AI の計算過程、ツール環境、社会的運用、倫理的責任など多様な要素の交点に位置づけられる以上、翻訳研究は必然的に学際的性格を強めることになる。

この学際化は、翻訳研究の領域拡大ではなく、問題意識の深化を意味する。すでに近年の研究においては、翻訳行為を対象として、眼球運動計測、キーストロークログ、脳波測定などを用いた認知実験研究が試みられている。これらの研究は、翻訳行為を単なる成果物分析ではなく、プロセスとしての行為として捉えようとする試みであり、AI 翻訳との関係を分析する上でも今後ますます重要性を増すと考えられる。

さらに、AI 翻訳の利用には、データバイアス、著作権、情報漏洩、文化的誤表象など、倫理的問題が必然的に伴う。このことは、翻訳研究が技術的問題にとどまらず、社会的・倫理的責任をも射程に収める必要があることを示している。このように考えると、AI 時代の翻訳研究は、もはや単なる翻訳研究の枠内にとどまるのではなく、認知科学、情報科学、倫理学、文化研究などとの交差点に位置づけられる学際的領域へと変容しつつあると言える。

本章の議論から明らかになるのは、AI 時代の翻訳研究が、対象・方法・理論枠組みのいずれにおいても再編成を迫られているという点である。翻訳研究は、単に良い訳文とは何か、訳者はどのような戦略を用いたかといった問いにとどまることはできない。中心的課題は、むしろ次のようなものが挙げられる。例えば、翻訳はどのようなアクターネットワークによって成立しているのか。人間とAIの協働構造は翻訳の本質をどのように変容させているのか。翻訳における責任主体はどのように構成されているのか。この意味において、翻訳研究は成果分析中心の研究から、構造分析中心の研究へとパラダイム転換しつつあると言えよう。

VI おわりに

本稿は、AI 翻訳技術の急速な発展を背景として、翻訳行為の構造変化に従って翻訳主体の在り方がどのように変容しているのかを理論的に検討した。従来、翻訳研究においては

訳者イコール翻訳主体という前提が暗黙裡に共有されてきたが、ニューラル機械翻訳や大規模言語モデルが翻訳実践の中核に組み込まれるようになった現在、この前提はもはや覆されている。筆者はこの問題意識に基づき、訳者の職能をめぐって総合的に再考してきた。

本稿は伝統的翻訳理論における主体性論および不可訳性論を整理し、翻訳が本質的に解釈的・創造的営為であることを確認した。解釈学的翻訳論、脱構築的翻訳論、文化論的翻訳研究はいずれも、翻訳を単なる言語変換ではなく、意味生成と文化的調整の行為として捉えてきた。この観点からすれば、AI 翻訳がいかに高精度化しても、文化的文脈理解や価値判断を要する領域においては、原理的限界を免れえないことが理論的に示される。

その際、翻訳プロセスの構造変化に注目し、今日の翻訳実践がもはや単線的な人間中心モデルによっては説明できないことを論じた。翻訳は訳前・訳中・訳後のすべての段階において AI と人間が相互に関与する循環的プロセスとなっており、翻訳成果物は単独の人間訳者によってではなく、多様な要素の相互作用によって共構成されている。この現象を理論的に把握するために、本稿はラトウールのアクターネットワーク理論を援用し、翻訳主体を「分散的に構成される主体」として再定義する必要性を提起した。

また、こうした構造変容を踏まえ、AI 時代における訳者職能の再構成を試みた。訳者もはや単なる翻訳実行者ではなく、文化的調整者、意味判断者、人間-AI 協働の設計・調整者、倫理的責任主体といった多層的役割を担う存在へと変容している。本稿はこの変化を能力の更新という適応論的視点にとどめず、翻訳行為の構成原理の変化として理論的に位置づけた点に独自性がある。

AI 翻訳の普及が翻訳研究そのものの枠組みにも変革を迫っている。翻訳研究は、訳文の分析や個体的訳者分析を中心とする従来パラダイムから、人間-AI 協働構造の分析、翻訳ネットワークの構造分析、責任主体の再定位といった新たな研究課題へと射程を拡張しつつある。翻訳研究は今後、認知科学・情報科学・倫理学・文化研究と交差する学際的領域として再編成される必要があると考えられる。

本稿は理論的考察を中心とした研究であり、実証的データに基づく検証を十分に行ったわけではない。今後の課題としては、異なる翻訳ジャンルにおける人間-AI 協働構造の比較分析、訳者の認知負荷の変化に関する実験研究、AI 翻訳利用に関する倫理的判断の実態調査などを通じて、ここで提示した理論的枠組みを実証的に検証していく必要があるだろう。

一方、本稿の理論的枠組み自体についても、さらなる検討を要する課題が残されている。本稿は人間訳者を「結節点」として位置付けたが、今後 AI 技術がさらに発展し、AI 自身が判断を行う能力を高めた場合、結節点の所在はどう変化するのか。この問いは、理論的枠組み自体の限界を示すと同時に、翻訳研究が技術発展と対話し続ける必要性を示している。

しかしながら、ここで示したように、AI 時代における翻訳を単なる技術問題としてではなく、翻訳がどの主体によって行われているかという根本問題から再考することは、翻訳研究において今後ますます重要になると考えられる。本稿で提示した理論的枠組みは、筆者自身の翻訳・通訳実務における継続的な観察経験とも密接に関係している。AI 翻訳や機械同時通訳が導入された現場では、訳文生成自体は AI によって行われる一方で、その妥当

性判断、文脈調整、責任の引き受けは依然として人間訳者に委ねられている。このような実務上の観察は、人間と AI が対等に主体性を分有するのではなく、人間を中枢とした非対称的な協働構造が形成されていることを示唆している。

本稿は、こうした探索的・質的観察を直接の分析対象とするものではないが、翻訳実践の変容を理論的に記述する枠組みを提示することによって、今後の実証研究に向けた分析視角を提供するものである。AI 翻訳の発展は翻訳の終焉ではなく、むしろ翻訳という行為の本質を再認識させる契機として理解されるべきである。

参考文献

Bruno Latour (1987) *Latour: Science in Action - How to Follow Scientists & Engineers through Society*. Harvard University Press.

Mona Baker (1998) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. Routledge.

Roman Jakobson (1959) *On Linguistic Aspects of Translation*, in R. A. Brower, ed. *On Translation*. Cambridge: Harvard University.

フィリップ フォルジェ (1990) 轡田収訳『テキストと解釈』産業図書.

ガダマー・ハンス＝ゲオルク (2012) 轡田収等訳『真理と方法 I』法政大学出版局.

高橋哲哉 (2003)『デリダ 脱構築』講談社.

ブリュノ・ラトゥール (2019) 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.

成田一 (2024)「AI 翻訳にも限界がある」『Japio YEAR BOOK 2024』p230-238.

瀬上和典 (2018)「機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性」『AGLOS Special Issue: Workshop and Symposium 2016-2017』p1-24.

魏子杭・沈伊超・趙雪 (2020)「人機合作翻訳模式下『訳前編集』策略研究」『人工智能時代翻訳技術研究』p66-77 知識産権出版社.

陸曉蕾・黄玲毅 (2020)「機器翻訳技術研究：演变与展望」『人工智能時代翻訳技術研究』p29-45 知識産権出版社.

陳菁・温艷娟 (2024)「信息時代訳員生態位的演变与優化」『翻译研究与教学』p40-46 復旦大学出版社.